今週最後の授業を終えた後、はいつものスーパーマーケットに立ち寄った。

　野菜コーナーに向かい、スマートフォンでレシピを見ながら今日の料理を考える。

　キッチンで料理をするなど何年ぶりだろうか。ヴァンパイアハンターとして活動している時はたいてい外食か携帯食だった。楽しみなような面倒くさいような複雑な感情が胸をそわつかせている。

　そういえばは料理ができるのだろうか。

「友達……か……」

　この間、盛黄を家まで送っている時、彼女は銀華のことを友達と呼んだ。

　ヴァンパイアと血みどろの戦いをしていた自分。

　女子高生として充実した日々を過ごしていた盛黄。

　育ちも性格も趣味も合わない。そんなふたりが友人になれるとは思えない。

　そもそも自分は彼女と友人になる資格があるのだろうか。

　雑念を振り払うために首を振る。今はが発生した理由について集中するべきで、そんなことを考える必要はない。どうも日本に戻ってきてから気が緩んでいる。ここにいるヴァンパイアハンターは自分のみなのだから、むしろ気を引き締めなければいけないのに。

　本部や日本支部からの返信はだにない。が終了してから組織の機能が低下しているとは聞いていたが、まさかここまでとは。

　場当たり的だが、今はテンプテーション・ブラッドの持ち主である盛黄の護衛について敵を待ち受けることが最良だろう。無関係な彼女をせにするようで気が引けるが、致し方ない。

　休みの日も護衛につくことを伝えると、盛黄はにこやかに快諾した。

　──んじゃ、次の休み、一緒に街にいこ！

　街に出る目的は服の買い物らしい。インターネット通販で済ませてはどうかと提案したが、実際に試着しなければ購入を決められないと返された。そういうものらしい。

　あの時は勢いに押し切られて了承してしまったが、日中は護衛につく必要はない。随分無駄な約束を結んでしまった気がする。

　後悔を渦巻かせつつ、買い物カゴにキャベツを放り込んだ時、柱の鏡に映る自分と目が合った。

　その口は緩みに緩んでいた。

　慌てて口を押さえ、そそくさと精肉コーナーに足を進ませる。

　し、知り合いがもいなくてよかった……。

　　　　◆　　　◆　　　◆

　休日の昼下がり。晴れ時々曇り。薄着でも過ごしやすい気温。絶好の外出。

　待ち合わせ場所の駅前に到着したは、ショルダーバッグからアイパレットを取り出し、中の鏡でメイクのチェックを始めた。

　今日の自分は気合が入っている。まつ毛はいつもよりバシバシにキメてきたし、涙袋には強めのハイライトを入れてきた。メイクだけでなく、服にだって気を抜いていない。新品のキャップ。チュールハイネックのトップスの上にビスチェ。ハイウエストのラップショートパンツからはこれでもかというほど足が出ている。

　露出度高めの格好だが、あの美少女の隣に立つのだから、これくらいしなければ見劣りしてしまう。最悪の場合、死ぬ。

　琉花が鏡を見ていていると、向こう側から私服姿のがやってきた。

「すまない。待たせた」

　四十七は地味な色のフーディーとデニムパンツというラフでボーイッシュな格好だった。黒手袋やアクセサリーは標準装備らしく、今日もギラギラしている。服をあまり持っていないと話していたが、素材がいいのでなんでも似合って見える。

　つか、なにあの股下。加工アプリ使ってないってマジ？

「なんだよその足～。ずるいって～。長さちょっと分けてよ～」

「分けられるわけがないだろう」

　だる絡みをばっさりと切り捨てられ、琉花は素直に引き下がった。

　ひとまず四十七と合流できた。遊びに出る前に言うべきことを言っておこう。

「んじゃ、仕切り直して……バイト代入ったんで、今日はるぜ！」

　琉花が勢いよくピースサインを突き出すと、四十七は不思議そうに首を傾けた。

「なぜ君がそんなことをする必要があるんだ？」

「だって、四十七さんってあたしの命の恩人じゃん。お礼しとくべきっしょ」

「礼などいらない。あれは狩人として当然のことだ」

「ふっ、言うと思った」

「なに……？」

　をひそめる四十七の前で、琉花はをしてから表情を引き締めた。

「命の恩人だからってだけじゃなくて、四十七さんの歓迎も兼ねての奢りっすよ。こーいう時は黙って奢られるのがマナーだよ」

「……そういうものなのか？」

「そーいうもんそーいうもん」

　短い付き合いだが、この間の戒律の話から、四十七銀華が規則ごとを重視する性格だということはわかっていた。

　そのためマナーをにすれば説得できるのではと思ったのだが、効果抜群のようだ。

「……出し過ぎと判断したらすぐに止めるぞ」

「うーし、ゲントリー」

　説得の達成感に琉花がを握ると、四十七が首を傾けた。

「げんとりーとはなんだ？」

「ゲントリーってのは……えーと、あれよ。ゲンチを……ほら。吐いたツバ飲むなや的なやつ」

「言質を取った、の略語か？」

「そそ。それそれ！　ゲンチを取ったんすよ」

「盛黄……『言質』の意味は理解しているか？」

「…………へへへっ」

「笑ってごまかすな」

　怒られが発生したことで琉花は逃げるように駅の中に飛び込んだ。

　すぐに四十七の長い足に追いつかれてしまったが。

　電車の座席がカーブで揺れる度に、街へ向かっているという気分が強まってくる。

　琉花の住む地域にもデパートや服屋はあるが、やはり街のえにはわないし、ワクワク感が段違いだ。四十七の歓迎会という名目ではあるが、自分の買い物もいくつかしたい。事前チェックもしてきたし。

「そーいや、四十七さんって今まで休みの日ってなにしてたん？」

　話題を振ってみると、隣の四十七は思い出すようにを見上げて、

「休暇か……たいていは訓練をしていて……そうでなければ睡眠を取っていたな……この半年間は山の中だったので、それらも満足にできなかったが」

「山の中って……キャンプ的な？」

「キャンプというよりサバイバルだな。やつらとの戦闘のために山に潜伏する必要があったんだ。食料確保や索敵のために動き続けなければいけなかったので、訓練や睡眠は満足に取れなかった」

「な、なんでそんなサバイバるヒツヨーあったん？」

　琉花が尋ねると、四十七はデニムパンツからスマートフォンを取り出し、細い指で操作し始めた。あの黒手袋はスマートフォンにも対応しているらしい。

　四十七がこちらにスマートフォンを傾ける。画面に表示されているのは琉花のスマートフォンにも入っているヴァンパイアサーチアプリだった。

「この間少し説明したが、このアプリケーションは電子機器をソナー代わりにして、ヴァンパイアや眷属、発動中の狩人の位置を特定する。そのため、電子機器のない場所では意味をなさない……いつからかわからないが、やつらもこのアプリの存在を知ったらしく、検知されないように山や無人島に逃げ込むようになってね。狩る側の私たちも自然とそういう場所にくことになった……というわけだ」

　四十七は指先に祓気を宿らせると、画面をトントンといた。マップ上には高速で移動する青色の点が光っている。

「場合によってはやつらよりも山のほうが恐ろしかった。凍死しかけたことや熊と戦った時のことは今でもたまに夢に見る」

「熊って……リアル熊？」

「ああ。車並みの巨体に俊敏な動き……三人がかりでようやく勝てた」

「勝ったんかい」

　半笑いでツッコミを入れていると、四十七の顔についた薄い線に目が吸い寄せられた。

「その傷は熊にやられたん？」

　琉花が聞くと、四十七は思い出したかのようにをでた。

「いや、これはやつらとの戦闘でついたものだ。に毒を持った個体がいてね。不覚を取って引っかかれてしまった。毒は治ったが、傷痕が少し残った」

「コンシーラーとかで消せないの？」

　琉花がコンシーラーによる傷痕の消去を提案すると、四十七は唇の端を少しめた。

　困惑としさを含めたみを浮かべつつ、四十七は言った。

「この傷痕は私の戦いの証、私の一部でもある。醜いものだと思うし、消えても構わないが、どうしても消したいというわけではないんだ」

　四十七の答えを聞いて、琉花はショルダーストラップをぎゅっと抱きしめた。

　余計なこと言っちまったー……。

　彼女の聖域に無遠慮に踏み込み、そこを荒らしかけた。いつもめいりやひなるに距離感バグってる時があるから気をつけろと注意されているのに、やってしまった。

「四十七さん。ごめ……」

「だが、コンシーラーとはなんの略語なんだ？」

「……………………んあ？」

　四十七の言葉の意味がわからず、謝罪が止まる。

　なに言ってんのこの人？

「バイチは倍ほどレベルが違う。ゲントリーは言質を取った。だから、コンシーラーは……今週知り合いとラーメンに……いや、違うか」

　見当外れの言葉に琉花の顔が険しくなる。

　マジでなに言ってんだこの人？

「し、四十七さん、もしかして、コンシーラー、知らない？」

「ん、ああ。そうだが？」

「はぁ～～～～んっ!?」

　目の前の現実が受け入れられず、琉花の口から大声が出る。二十一世紀にこんなことがあっていいのか。

「盛黄、電車内での大声は迷惑だぞ」

　四十七の注意に構わず、琉花はショルダーバッグに手を突っ込むと、メイクポーチからコンシーラーのボトルを取り出し、彼女の鼻先に突きつけた。

「コンシーラーってのはこれ！　シミとかクマとか隠すコスメ！」

「コスメ……ああ、化粧道具のひとつか」

「マジで知んないの？」

「いや、私とは縁のないものであるし……」

「縁のない……？　ま、まさか……」

　目を見開いて四十七のやたらと端正な顔を観察する。

　銀色の髪と眉とまつ毛。筋の通った高い鼻。柔らかそうな唇。なめらかな肌は見ただけでもちもちしていそうで……。

　琉花は唾液をごくりと飲み込んで、

「まさか、あんた……すっぴん？」

　恐る恐る聞くと、四十七は琉花から体を引きながら、

「そうだが……？」

「あ、あぁ、あわわ、あーわわわわわ……」

　予想外の言葉に口が震える。

「なんてこったい。ありえん。女子高生が休日に外に出んのに……ノーメイクなんて……」

　琉花が全身を震わせていると、四十七は心外と言いたそうに口元をむっとさせた。

「ま、くらいは整えている」

「まままーま、眉毛て！　そんなん最低限のマナーじゃん！　マナー講師もあえて言わないくらいのマナー！　お出かけに盛り上がってガン盛りメイクしてきたあたしがバカみてーじゃん！」

　あまりのショックに琉花は顔を押さえた。もちろんセットが崩れないくらいの強さだが。

「盛り上がってくれていたんだな……」

　手のから、複雑そうな顔をしている四十七が見えた。

　その顔があざとかわいくてさらに腹が立つ。こんな感情ぐちゃぐちゃになっているのは誰のせいだと思っているのか。

「ヨテーヘンコー！」

　そう言うと、琉花は四十七の肩を押さえ、戸惑う彼女の目に自分の目を合わせた。

「四十七さん！　コスメ！　今日はまずコスメ見に行くよ！」

「今日は服を買いに行くだけでは……」

「いーからあたしについてきな！　この天然美少女！」

「それはなのか……？」

　四十七はなおも戸惑っていたが、琉花の気迫に有無を言わさないなにかを感じたらしく、こくりと頷いた。

　電車を降りた琉花は四十七の腕を引っ張りながら、駅の改札を通り抜けた。

　駅と直結している大型デパートに入り、様々なコスメティックエリアを横断し、三階のという大手化粧品ブランドの店舗に入る。

　店員にメイクレッスンを受けられるかどうかの交渉をすると、幸運なことに予約にキャンセルがあったらしく、すぐに対応してもらえることになった。

　店員を待っている間、四十七はずっとそわそわしていた。どうやら化粧品に囲まれて落ち着かないらしい。微笑ましかったが、今の自分はメイクの鬼だ。笑ってはいけない。

　店内の中央には長いテーブルが設置されており、その上にはメイクレッスン用の鏡台が備え付けられていた。周りには所狭しとコスメティックが並べられている。リップ。グリッター。フェイスカラーパウダー。プライマー。ファンデーション。ブラシ。アイパレット。アイブロウペンシル。アイライナー。ビューラー。マスカラ。香水。アロマキャンドル。アロマオイル。シャンプー。ヘアオイル。ボディソープ……。

　流石コロール。老舗ブランドということもあって圧倒されるほどの品揃え。高級感が洪水のようにれかえっている。

「……盛黄もここの化粧品を使っているのか？」

　雰囲気に耐えかねたのか、四十七が息苦しそうに言った。

「や、あたしが使ってんのはウィルメイクとかゼンアンドみたいなプチプラのやつ。あー、でもたまにジュリアみたいなちょい高めのやつも使うか」

「ぷちぷら……？　じゅりあ……？　それならばなぜ君はこの店を選んだんだ？」

「だって初メイクなんだし、プロからメイクレッスン受けたほうがいいっしょ」

「まともな理由だ……」

「あん？」

　琉花がみつけると、四十七はふいと顔をそらした。

「……あと、四十七さんは上品メイクが合ってる気ぃするかんね。あたしみたいな盛りメイクもいいけど、まずはセートーハ知っといたほうがいーかなって」

「本当に君は盛黄琉花か？　まともすぎるぞ」

「あんたは失礼すぎ！」

　琉花が抗議のを四十七の腕に押し付けていると、コロールの店員がやってきた。黒服に身を包む二十代の女性は、琉花と銀華の前で一礼した。

「本日はご来店まことにありがとうございます。四十七様を担当させていただきます、美容部員のです」

　折井と名乗った女性が頭を上げると、ふわりと芳香が漂ってきた。おそらくコロールの商品のなにかの香りなのだろう。嗅いでいるだけで心地いい。

「よ、よろしくお願いします」

　四十七が硬い動作で頭を下げる。かなり緊張しているのかコチコチだった。

　緊張を解くために隣から四十七の肩を撫でつつ、

「あたし、この子の付き添いなんすけど、ついてってもいーすか」

「他のお客様がご来店された際はお立ちいただくことになってしまいますが……よろしいでしょうか？」

「だいじょぶっす。バイトで立ち慣れしてるんで」

　琉花がそう言うと、折井はにこりと微笑むことで返事した。商売用の愛想笑いとわかっていてもれそうになる。

「では四十七様、あちらへどうぞ」

「は、はい」

　折井に導かれ、四十七は大きな鏡が置かれたテーブル席に座った。

　琉花が横についたことを確認してから、折井は四十七の後ろから話し始めた。

「四十七様はご普段、どちらの製品をお使いですか？」

「ふ、普段……ム……いや……」

　四十七は気まずそうに目をさまよわせ、口をもごもごと動かしていた。とてもヴァンパイアや熊に打ち勝った戦士だとは思えない心細そうな表情。早く助けてあげないと。

　琉花が助け舟を出そうとした時、折井が言った。

「私もシルバーには挑戦したことがあるんですが、地の色が強すぎたのかうまくいかなくて。四十七様のはとてもおきれいに染まっていますね。どちらのカラコンをお使いですか？」

「か、から、こん……？」

　助け舟じゃなくて救命ボートが必要だわ。

「折井さん折井さん」

「はい？」

「この子の目、カラコンじゃねっす」

「……………………えっ」

　折井の自然で不自然な笑顔がこわばった。

　最近のメイクとしてカラーコンタクトレンズの使用は珍しくない。琉花も青紫色のカラーコンタクトレンズを愛用しているし、つけていなければ人前に出られないという女子もいるくらいだ。

　そういった事情もあって折井は銀華の瞳をシルバーのカラーコンタクトレンズと勘違いしたのだろうが、残念なことにこれは天然ものだ。

「こ、これでカラコン入れてないの!?」

　よほど衝撃的だったようで折井の口調が崩れた。

　美容部員としての役割を忘れたのか、折井は鏡越しに四十七のことを眺め回している。なんだか一気に親しみやすくなった気がする。

「や、マージでびっくりっすよね」

「はい……はい……！」

「しかもこの子、ノーメイクなんすよ」

「ノーメイッ!?　あぁわ、あわわわわ」

　折井がしている。琉花が電車内でした時と同じ反応だった。

　共感者の出現に琉花が大きく頷いていると、

「……私も傷つく心は持っている」

　四十七が小さくいた。

　うつむいているせいでその顔はわからないが、悲しそうな雰囲気が伝わってくる。

「あ……ごめん……やりすぎた……」

「申し訳ございません……大変失礼いたしました……」

　琉花と折井が謝っても四十七は顔を伏せたままだった。かなり落ち込んでいるらしい。

　……ここはにいかないとダメだな。

　四十七の肩に手を添えて、琉花は彼女に顔を近づけた。

「折井さんの前で言うのはアレなんだけどさ。あたしのマジな意見を言うと、別にすっぴんでもいいと思うんすよ。メイクって時間とかお金とかかかりまくるし、四十七さんはそのままでも美人だし……でも、知らないですっぴんなのと、知っていてすっぴんなのはちょい違うっつーか」

　琉花は一度そこで言葉を切り、四十七の銀眼と自分の目を合わせた。

「四十七さんって今まであたしらのために戦っ……苦労してくれたんでしょ。だから、あたし、四十七さんにはこっちの世界にいっぱい楽しいことがあるって知って欲しいんすよ」

　今まで四十七銀華はヴァンパイアから人々を守るために戦ってきた。

　彼女が守り切った世界にはそれだけの価値があると知って欲しい。彼女がこの世界を楽しむことこそが今まで費やした時間や気持ちへの報酬になる。琉花はそう思っていた。

「なんで、やっぱごめんなさい……的な……へへへ…………どっすかね？」

　琉花がもごもごと謝罪を言うと、

「……わかった。許す」

　四十七はに刻まれたしわを徐々にほぐしていった。

　あっぶな！　なんとか機嫌持ち直した！　セーフセーフ！

　琉花が冷や汗を浮かべながら離れていくと、折井が謝罪しつつ四十七に話しかけた。

「もしかしますと、四十七様は海外にご滞在されていましたか？」

「ええ。最近まで」

「やはりそうでしたか」

「やはり？」

　四十七が聞き返すと、折井はゆっくり頷いた。

「欧米はポイントメイクの文化ですので、日本のように毎日フルメイクをするわけではないんです。それには気候や肌質が関係しているのですが…………四十七様のメイクへのご関心は海外にご在住していたことが影響しているのだと思います」

　折井は四十七のメイク知識の薄さを海外の文化からの影響と思っているようだ。

　その実態は山籠りサバイバル生活だが、別の世界にいたという意味では的外れということでもないので黙っておく。

「ですが、海外におきましてもフォーマルな場ではメイクをしますので、やはり一通りのメイク方法は身につけておいたほうがよいと思います」

　公式な場所で恥をかかないためにメイク技術を身につけよう。

　折井が言っているのはそういうことだった。一度取り乱したが、やはりプロ。一瞬で客にメイクの必要性を感じさせた。

「じゃ、折井さん、この子に通しでメイクを教えてあげてください」

「通し……というのは、フルメイクのメイクレッスンということでしょうか？」

「そっすそっす」

　琉花がうなずくと、折井は気まずそうな表情をつくり、顔を近づけてきた。

「大きな声では言えませんが、メイクレッスンで使用した製品はお買い上げいただくことが慣習となっていまして……フルメイクのメイクレッスンとなりますと、製品の点数がかなり……」

「あ、使った商品買うってことなら問題ないっす。持ち合わせあるんで」

　琉花がそう言うと、折井はまばたきしつつ離れていった。大人としてはなにか言うべきだと思っているらしいが、店員としては抗議する気はないというところか。

「んじゃ、折井さん。おねしゃす」

「……承知いたしました」

　折井は返事をすると、慣れた手付きでテーブル下からボトルやパレットを取り出し、四十七の前に並べていった。すべての容器の表面にはコロールのロゴが入っており、華やかにきらめいている。

「では、クレンジングから始めます。本来クレンジングはメイクを落とすためのものですが、こちらの製品はスキンケアも兼ねていますので、本日はスキンケア用として使用いたします」

　折井は解説を続けながらクレンジングボトルをコットン布へ傾け、四十七の顔にコットン布を優しく当てていく。

「女性の肌は男性と比べて皮脂量が少なく傷つきやすい傾向にあります。そのため、洗顔やスキンケアではこすりすぎないことが重要となります」

　折井は別のボトルを取り出すと、中身を指先につけ、四十七の顔に点々と塗布していく。

「ベースとプライマーを塗っていきます。ベース……化粧下地はスキンケアや肌のくすみ消し、プライマーは肌の光沢消しや血色出しといった効果があります」

　折井はクッションを取り出すと、四十七につけた滴を丁寧に伸ばしていった。

「この二種にはメイク崩れを予防したり、質感を高めたり、といった効果もあります。効果が重複する部分も多いので、ひとつで済ませる方もいらっしゃいますし、何種か組み合わせてご使用なさる方もいらっしゃいます」

「は、はあ……」

「ま、メイクは自由ってこと」

　目を回している四十七に笑いかける。彼女からすれば異世界の知識を詰め込まれているようなものだ。混乱するのも無理はない。

「折井さん。この子ってブルベっぽいし、ピンクよりのメイクっすか？」

　琉花が話しかけると、折井は目を細めた。

「所感としてはサマータイプのように見えますが、私はパーソナルカラーリストではありませんので、正確な診断はできません。そのあたりも考慮に入れて、今回は中間よりのメイクをしていきたいと思います」

「あー、中間メイク……一番ムズいやつっすね」

「……ぶ、ぶるべとはなんですか？」

　四十七が苦しそうに聞くと、折井は少しだけ手の動きを遅くした。

「ブルベやイエベというのは、ブルーベースやイエローベースといったパーソナルカラーのことです。パーソナルカラー……つまり、その人の雰囲気に合った色ということですね。肌や髪や目の色から判断され、メイクの方向性や服装を選ぶ際の基準となります」

「肌や、髪……」

　四十七はそう言って鏡の中の自分を見つめた。銀髪銀眼からもパーソナルカラーを判断できるのだろうかと思っているのだろう。

　四十七の疑問を見透かしたように、折井はにこりと笑って、

「パーソナルカラーはすべての人種に存在すると言われています。基本的にはブルーベース、イエローベース、グリーンベースと分けられ、そこからサマータイプやウィンタータイプと細分化されます。海外ではさらに細分化されていて、クール、ウォーム、ナチュラルと分けられ、ライト、ディープ、ヴィヴィッド、ソフトと……」

「折井さん。待って待って。うちの子が壊れちゃう」

　わけのわからないを聞かされ続け、四十七は石像のように固まっていた。

　折井は微笑を浮かべつつ、四十七の額に浮かんだ汗をコットンで拭う。

「あくまでパーソナルカラーは指標のひとつですので、従う必要はありません。ご自身がお好みの服装を優先したほうがよいと思いますよ」

　折井が微笑を浮かべると、四十七は硬い表情で頷いた。

　琉花は大人しくそれを見守っていたが、四十七の傷痕がぴくっと動いたのを見て、

「そだ。次くらいにコンシーラー使います？」

「はい。そのつもりですが……」

「あー……四十七さん、傷痕どーする？」

　コンシーラーはニキビや肌荒れなどを隠してくれるコスメティックだ。それを使えば傷痕を消すことができるかもしれない。

　しかし、電車内で彼女はこの傷痕を自分の一部であると言っていたし、積極的に消したいわけではないとも言っていた。『できる』からといって『してもいい』わけではない。

「そうだな……試してみよう」

　四十七は拍子抜けなほどあっさり琉花の提案を受け入れると、折井に対して頭を下げた。

「折井さん。お願いします。できる限りでいいので」

「承りました」

　折井はボトルからブラシを抜くと、コンシーラーを四十七の傷痕につけていった。

　コンシーラーを塗った後もメイクは続く。

　ファンデーション。濃淡それぞれのチーク。シェーディングパウダー。

「見えなくなると存外寂しいな……」

　薄くなった傷痕を見た四十七がぽつりと呟いた。

　やっぱ余計なことだった……？

　琉花が不安に思っていると、折井が新たなメイク用の道具を取り出した。

「では、アイメイク……目周りのメイクをしていきますね」

　四十七の瞳周りにアイペンシルやアイブロウブラシが走る。アイホールにかすかにグリッターを塗られ、涙袋が強調される。ビューラーで強調されたまつ毛にマスカラが塗布される。仕上げのリップはピンク。シェーディングやハイライトの微調整……。

　折井はテーブルに道具を置くと、四十七に微笑みかけた。

「メイクは以上で終了となりますが、気になる点はございますか？」

　折井の声に反応を示さず、四十七はメイクを施された自分の顔をじっと見つめていた。

「……どーよ、人生初メイクは」

　琉花がおそるおそる聞いてみると、四十七はすっと顔を上げた。

　初めて四十七銀華を見た時、その美しさに驚くと同時に冷たい印象を受けた。

　彼女のことを知った今ではその印象が間違いで、ただの不器用人間だということがわかっているが、今は外見からも冷たさが抜けているように見えた。

　簡単に言えば、超美人。

「初めてスカートをいた時のような気持ちだ。そわそわして落ち着かない」

「しくない？」

「そういうわけではないが……照れくさい……いや、ゆい、だな」

　困り笑いを見せる四十七を見て、琉花の肩からどっと力が抜けた。

　つ、連れてきてよかったー！

　電車からここまで感じていた緊張の糸をたるんたるんに緩ませて、琉花は微笑みかけた。

「……そんじゃ、しばらく自分とにらめっこしてて」

　琉花はそう言い残すと、テーブルから離れて折井に対して手招きした。

　ここから先のことは四十七には聞かせたくない。

　近づいてきた折井に、琉花は小声で話しかける。

「それで折井さん。今日使ったのって全部でおいくらすかね？」

　折井は今回のメイクレッスンを始める前、製品を何点か買う必要があると言った。

　支払い役の琉花としてはそろそろ値段を把握しておきたいが、四十七に値段は聞かせたくない。テーブルから離れたのはそういう思惑があってのことだった。

「合計としましては、こちらです」

　折井の持つタブレットにはゼロが四つ並んでいた。

　うげ……きびしーなー……。

　商品の数から予想はできてはいたが想像以上のダメージだ。これを払ってしまうと財布がひんし状態になること間違いなしだ。

「んじゃ、全部ください。ブラシとかの道具も含めて」

　それでも、これを買うことで四十七銀華に報いることができるのなら。むしろ安いくらいではないか。

「使用製品すべてをお買い上げいただく必要は……」

「全部でお願いします」

「……本当によろしいのですね？」

「はい。もちで……」

「出し過ぎたら止める、と言ったはずだぞ」

　気がつくと、背後に四十七が立っていた。

　流石ヴァンパイアハンター。近づいてきたのにまったく音が聞こえなかった。

　出し過ぎたら止める。それは駅前で交わした約束だった。奢りを持ちかけた琉花に対して、四十七は条件つきの承諾を示した。

　なので、理屈としては四十七が正しいが……こっちだって間違っているわけじゃない。

「じゃ、八割。八割あたしが出す。四十七さんは二割。これでどっすか」

「そういうことではなくて……」

「んじゃ七割で」

「だから、出し過ぎだと……」

「半分。半分だったら？」

「そもそもなぜ出してもらうほうが譲歩しているんだ……？」

　そう言うと、四十七はめるように長い溜め息をついてから、

「半分出した上で、私も君になにかを買う。それが条件だ」

「うっし、ゲントリー……折井さん。話まとまりました！」

　四十七の承諾を獲得した琉花は折井に拳で合図を送った。心変わりしないうちに精算してしまおう。

　折井は素朴な笑顔を浮かべると、周りに聞こえないように小声で言った。

「こちらでも少々お勉強させていただきます。製品としては訳ありになってしまいますが……」

「お、助かります！」

「では、少々お待ちください」

　折井は丁寧にお辞儀をすると、店の奥側に引っ込んでいった。

　隣を見るとフルメイクされた四十七が立っている。彼女を視界にいれているだけで、琉花の口はにやついてしまう。

「やー、ダチがきれーになってるのを見るとなんか嬉しーね」

「ダチ……」

「あ、これ友達の略ね」

「それくらいはわかる」

　ねたような表情。一つ上の友人のかわいらしい表情に、琉花の口元はますます緩んだ。

「盛黄、私と君は友達なのか？」

　四十七の言葉を受け止めるのには時間を要した。

　ふたりきりで一緒に出かけているのに、それが友達でなかったらなんだと言うのだろう。なにか別の意味があっての問いかけなのだろうか。

「あ……ひょっとしてあれ？　名前で呼び合おう的な？」

「いや、そういうことでは……」

　恥ずかしそうに言い訳しているが、その顔には期待が浮かんでいるように見えた。

　琉花は空咳をして、隣に立つ友人に負けないくらいの美少女を気取って言った。

「欲しがりだなー、銀華は」

「……うるさいぞ、琉花」

　その後、琉花と銀華は目的もなくデパート内を見て回った。

　服を見たり、雑貨を見たり、スイーツを食べたり、コロールとは別のコスメを見て回ったり。買い物自体はあまりしなかったが、どこへ入っても気恥ずかしそうにしている銀華を見ることは楽しかった。

　デパートを出てスクランブル交差点を渡っていると、銀華が探るように言った。

「本当にそれでよかったのか？」

「もちもち。大満足」

　銀華の前でジュリアートのブランドロゴが入った小箱を振る。

　これはコロールでの『私も君になにかを買う』という約束によって銀華が買ってくれたものだった。箱の中にはのオーデコロンが入っている。

「しかし……その……」

　銀華の気まずそうな態度は香水の値段に由来するものだ。

　ジュリアートもコロールと同じくデパートコスメの一種ではあるが、どちらかというとプチプライス寄りのブランドであり、コロールと比べるとその価格は低かった。

　しかし、値段の格差が性能の格差にがるわけではない。琉花としてはジュリアートもコロールもどちらも同じくらい好きなブランドであるし、それに、

「友達からのプレゼントはもらっただけでサイコーにうれしーんだって」

　琉花の決めめいた答えにも、銀華はいまいち納得していなさそうだった。

　なんか切り替えるきっかけがヒツヨーか。

　周りに注意を払いながらメインストリートに入ると、クレープのキッチンカーを発見した。

「お、あれ食べよ！　あれ！」

「クレープ……さっきもデパートで菓子を食べたような気が……」

「あたしの胃袋、無限なんすよ」

　むげん……、と呟く銀華を放置してクレープのキッチンカーに近づいていく。

　振り返ると、こちらに向かってくる銀華と、彼女に吸い寄せられるように瞳を動かす人々が見えた。男女ともに口を半開きにして歩くスピードを落としている。かなり異様な光景。

「め、メイク効果すげー……みんな銀華を見てる……」

「メイク効果……？」

　そう言うと、銀華は周りを見渡して、

「普段と変わらないようだが……？」

「え？　ああー……そっかー……そーっすね……」

　フルメイクの影響で視線を集めていると思ったが、よく考えれば銀髪美少女にとってこの光景は日常の出来事だ。

　メイク効果わかりにくっ！

　内心文句を言いつつ、琉花が自分と銀華のクレープを注文していると、銀華が言いにくそうに呟いた。

「も、もり、もり……る、琉花も見られているようだが？」

「そりゃ、あたしだって気合入れてきたし。服とかメイクとか」

　琉花が見せつけるように胸を張ると、銀華は言いにくそうに口を開いた。

「今さらだが、君、足を出しすぎではないか？」

「ふっ、足は出せば出すほどかっこかわいーんだな、これが」

「そういうものなのか？」

「そーゆーもんなんすよ」

　そんな会話をしているうちにクレープが出来上がった。

　琉花にはいちごティラミスクレープ、銀華にはチョコバナナクレープが渡される。

「いただきやす！」

　目の前のそれに遠慮なくかぶりつくと、いちごのすっぱさとクリームの甘さ、クレープ生地の温かさが口に広がり、脳から多幸感が噴水のようにきた。ただでさえいい気分なのに、隣ではクレープにあわあわしているあざとかわいい銀髪美少女がいる。

　ん～……天国じゃん……。

　そんな最高に満ち足りた感情は、数秒後に薄れていった。

「あー……もー……」

　悪態の原因は後ろにいる男たちの集団だった。

　年齢は大学生か高校生くらいで、彼らはデパートの中で目が合ってから、一定の距離を空けて琉花たちについてきていた。いつか諦めると思って放置していたが、諦める様子がないばかりか、近づいてくる気配すらある。

　男子に言い寄られるのが嫌いというわけではないが、今は銀華との時間を大事にしたい。

「あんさー、銀華……」

「わかっている。つきまといだな」

　隣を見ると、クレープを食べ終わった銀華が紙をぐしゃぐしゃにしていた。あわあわモードから狩人モードに入っているらしく、その表情は厳しかった。

「問題を起こすわけにもいかない。どこかに隠れるか」

「……そーっすね」

　溜め息とともにクレープを食べ切り、銀華とともにメインストリートを進む。

　ストーキングは嫌な気分だが、幸いなことに街には人通りが多い。追跡をくのはたやすいはずだ。銀華に見惚れて妨害役になってくれる人たちもいるし。

「お、あそこ入るべ」

　銀華の腕を引っ張り、追跡者たちに見えないタイミングで大きな看板のゲームセンターに入店する。

　騒がしいＢＧＭやしいライトを浴びつつ、ずんずんと階段を登る。二階に登りきった頃には、男たちの姿は見えなくなっていた。

　もう少し警戒しとくか……、などと考えつつ三階への階段を登っていると、琉花の頭にまったく別の考えが浮かんだ。

「あ、ちょうどゲーセンだし、今日の記念残しとこーよ」

「記念？　どういうことだ？」

「ついてきて」

　銀華を先導してゲームセンター内を歩いていく。

　目的のを探し当て、カーテンをかき分けて撮影ブースに入ると、外よりも眩しい光が琉花と銀華を出迎えた。

「やっぱゲーセンはプリっしょ！」

　撮影ブースに入るだけで気持ちが上がる。プリクラでやることなんて写真を撮ってラクガキするだけなのに。どうしてこんなにワクワクするのか。不思議だ。

　そんな琉花とは反対に銀華は困惑していた。

「プリクラ……」

「あ、プリってのは……」

「それくらいはわかる。証明写真のようなものだろう？」

「うへへ、それだけじゃないんだな～」

　自慢げな顔とともに指を振ってから、琉花は言った。

「なんと。プリではポーズを決めていーんすよ！」

「ポーズを、決める？」

「うん。こんなのとかー。こんなのとかー」

　琉花がひねった両手を前に突き出したり、ピースサインを目元に持ってきて腰をひねったりするのを見て、銀華は不思議そうなものを見る表情をしていた。

「で、最近の流行りはコユピっすね」

「こゆぴ……？」

「小指ピースつって、こーやって小指をクロスさせんの。ふたりだったらお互いにやるとかもアリ。ほら、小指立てて」

　銀華が戸惑いがちに立てた小指に、琉花は自分の小指を重ねた。銀ラメネイルの小指と黒手袋に包まれた小指がクロスする。

　ふたりの指で作られた十字架を見つめて、

「こういったことにも早く慣れなければ」

　銀華がぽつりと呟いた。

「ん？　どゆこと？」

　琉花が聞くと、銀華はリップが塗られた唇を曖昧に歪めていたが、そのうちためらいがちに話し始めた。

「今回の事件を解決すれば私は本当にヴァンパイアハンターではなくなる。なので、こういったことにいちいち驚いていてはいけない、と思ったんだ…………またさんを泣かせたくはないしな」

　今まで銀華は戦いの日々を引きずり、周囲の困惑を呼んできた。ぶっきらぼうな言葉で速水ちなみを傷つけたのはその代表的な出来事だ。

　彼女が日常にみたいと思うのは当然だと思うし、琉花としても応援したい。しかし、

「別に驚いてもいーっしょ」

　それとこれとは話が別だ。

「銀華がフツーの生活に慣れたいって思うのはいーことだと思うんだけど、ソッコーで馴染む必要はないっつーか……あたし、今の銀華も結構いーなって思うし。ゆっくりでよくね？　って思うんすけど……」

　確かに今の銀華には問題が多い。しかし、それ以上に好ましい部分も多い。

　彼女の性質を無理矢理変えてしまうことは、彼女の美点を消してしまうことと同じだ。琉花としてはそれがいいことには思えないし、なにより、寂しい。

　琉花の言葉を聞いた銀華は考え込むような表情で固まっていた。

「……また意外とまともとか思ってる？」

　琉花が言うと、銀華は静かに首を振った。

「違う。感心していた」

「感心……マジすか？」

「本当だ」

「照れるー」

　銀華がなにに感心したのかはわからなかったが、理由を聞くことはしなかった。

　余計なことをして、この微笑みを消したくない。

「んじゃ、撮ろっか。コユピ、コユピ」

　銀華を引き寄せて、彼女の小指と自分の小指を合わせて撮影を始める。

　ハイテンションなアナウンスとともに撮影が終わると、琉花は銀華を連れて撮影ブースから落書きブースに移動した。目が倍くらい大きくなった自分たちを見てドン引きする銀華をよそに、琉花はペンで落書きをしていく。

「プリには『ズッ友』がマストっしょ」

「ずっとも……」

　銀華は少し考えるように呟いてから、照れくさそうに言った。

「ずっと、友達……？」

　琉花は勢いよくペンを掲げると、プリクラに花丸マークを書き込んだ。

　琉花たちがゲームセンターを出ると、ショルダーバッグから振動音が聞こえた。

　取り出したスマートフォンの画面に、薄暗い部屋でマイクを持つめいりの写真が表示されていた。その下には『カラオケ　きたれり』というメッセージと目印ピンを立てたマップ画像が表示されている。

「なんかめいひなが近くでカラオケしてるっぽいんだけど、合流していい？」

　いつもならなにも考えずに向かっているが、今は銀華と一緒だ。

　琉花にとってはめいりもひなるも銀華も友達だが、彼女たちにとってはまだ違う。了解は取っておくべきだ。

「ああ、彼女たちなら構わないよ」

　すんなりとした了承が嬉しくて、琉花は笑みを浮かべつつひなるにメッセージを返した。

　銀華とともに歩き出す。もはや通行人は気にならない。早く友達のもとに行こう。

　カラオケ店にたどり着き、店員に確認をとってふたりがカラオケルームに入ると、

「キタ～～～！　ホントに四十七さんいるも～～～～！　おいでませぇ～～～！」

　エコーがかったひなるのビブラートに鼓膜を揺らされた。

　ガチでうるさい。ここまでの盛り上がりを返して欲しい。

　ひなるへの不満に琉花が顔を険しくしていると、ジュースを飲んでいためいりが銀華を見つめて顔をほころばせた。

「あれ、四十七さんいつもと雰囲気違うね。きれい度マシマシじゃね？」

「えっへっへ～、照れんぜ～」

「なんで琉花が照れてんの？」

　めいりが半笑いでツッコミをいれると、間奏が終わったのか、ひなるの歌声がカラオケルームにき始めた。やはりうるさかった。

　銀華はコロールの袋をソファに乗せてめいりの近くに座った。

「琉花に化粧品店に連れて行ってもらってね。そこで化粧をしてもらったんだ」

「あー、そういうことね」

「初めての化粧だったので緊張した。琉花がいなかったら逃げ出していただろうな」

「え、初メイクってマジ？　うわ、キチョーなところを見逃し…………んおぉ？」

　めいりはあくびに似た声をらすと、ジュースのカップをゆらゆら動かして、

「なんか……今、変じゃなかった？」

「変ってなにがよ？」

「なんか四十七さんが、初メイクして、緊張して、逃げて……いや、逃げてはないけど……」

　めいりは額をとんとんと押さえた後、あ、と声を出した。

「わかった。琉花を名前呼びしてるんだ」

「お～、気づいたか～。気づかれちゃったか～」

　にやつきつつ、琉花は自分のショルダーバッグに手を突っ込むと、ついさっき撮ったばかりのプリクラをめいりに突きつけた。

「あたしら今日から琉花銀華のハナハナバディで行くんで。ヨロヨロ」

「な、なにそのプリ。うらやま……」

「ずるいずるいずるいずるいずるい!!」

　ひなるの絶叫がマイクを通して何倍にも増幅され、琉花たちの耳をれさせた。狭い部屋の壁がびりびりと振動し、めいりのドリンクにを立たせた。

「ひなだってしじゅ、銀華ちゃんと仲良くなりたいも！　ねね、銀華ちゃん。ひなも下の名前で呼んでいい？　呼ばせて！　呼ぶね！」

「あ、ああ、構わ、ないが……」

「んじゃ、ウチはさんでいい？」

「す、好きにしてくれ……」

　銀華が承諾すると、ひなるとめいりは達成感に満ちた表情を交わし合った。なにがあったのか知らないが、今日はふたりとも気分がノッているように見える。

　……いや、普段からこんなもんか。

「ひなる。めいり。今日は誘ってくれてありがとう。会えて嬉しい」

　銀華が微笑みかけると、ひなるとめいりはぴたりと動きを止めた。

「や、やば……一瞬息できなかったも……」

「やっぱ銀姐さんってきれーだよね……癒やされる……」

「あんたたち秒でデレすぎじゃね？」

　琉花が友人たちを眺めつつソファに座ると、銀華から曲を入力するためのポータブル機を突き出された。

「私は流行の曲を知らないので、歌うのは遠慮しておく」

「え、せっかくカラオケに来たんだし、銀華の歌聴かせてよ」

　琉花がポータブル機を突き返すと、銀華は当惑した表情になった。

「ム……しかし、私が知っているのは古い曲ばかりで……」

「それでいーって。めいもひなもわけわかんない曲ばっか入れんだから」

　琉花の勧めによって銀華が渋々ポータブル機を操作すると、カラオケルームのテレビにアルファベットの曲が表示された。

「これってどんな曲？」

「……大昔のメタルだよ」

　ひなるの歌が終わり、琉花とめいりが拍手をしていると、すぐに次の曲のイントロが入った。

　マイクを受け取った銀華は、今まで見たことないほど安らかな顔をしていた。

　──結論から言えば、銀華の歌声はすごかった。

　カラオケの安い電子音だというのに、銀華の声が重なるとＥＤＭアレンジされたように聞こえた。歌詞の意味はわからなかったが、その熱い旋律は心を揺り動かし、琉花たちの気分を高揚させた。

　祓気が出ていないのに銀華が輝いて見える。女神のようなその姿に見惚れ、琉花たちは彼女が歌い終わるまで動くことができなかった。曲が終わってカラオケ店のＢＧＭが戻ってきても、その金縛りは続いていた。

「うまー……」

　最初に立ち直ったのはめいりだった。顔を幼女のように緩ませている。

「すごい！　すっげー！」

　ひなるはそう叫ぶと、ネイルが飛んでいきそうな勢いで拍手した。

「疲れた。しばらく休憩する」

　そう言うと、銀華はテーブルにマイクを置いてソファにもたれかかった。銀色の美しい髪がソファに垂れ下がり、きらきら光っている。

「楽しさで疲れるのなんて久しぶりだな……」

　その言葉で、琉花の中に安心感と高揚感がとめどなく溢れてきた。

「嬉しいこと言ってくれんじゃん……」

　琉花はポータブル機に持ち歌を入れると、マイクを握って勢いよく立ち上がった。

「よし、今日はどんどん歌おう！　みんながかれるまでいこう！」

「……疲れていると言ったんだが？」

「そんなの関係ねえ！　なぜなら！　あたしらの！　体力は！　無限！　だから！」

　れる銀華。笑うひなる。そうなめいり。

　彼女たちの前で琉花はマイクに声を吹き込んだ。

　もちろん、くたくたになるまで！